



家庭教育・子育て支援 ～新しい「縁」づくりからの支援～

迎えに来たお母さんに、しっかり抱きつき、次第に安心したような表情を見せる赤ちゃんたち。

これは、当生涯学習推進センターで行っている子育て支援事業「子育て・親育ちサポートサロン」で、学びを終えた保護者の皆さんが、託児室にお子さんを迎えに来たときの一コマです。子育てサポーターの方々が親身にお世話くださっていますが、やはり子供にとって親は特別な存在なのだと実感しました。

本事業は、保護者の皆さん一人一人の子育ての悩みに寄り添い、学び、学びあう、事業です。このように深い信頼関係で結ばれている親子であっても、保護者の皆さんの子育ての悩みは尽きないものようです。

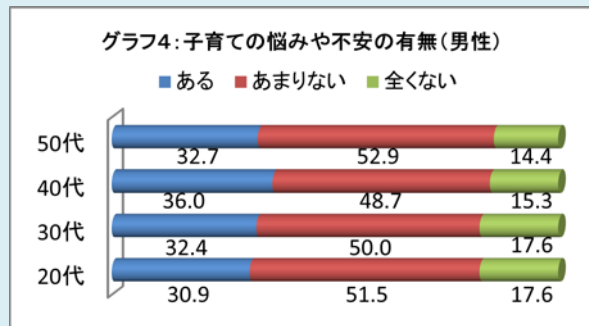
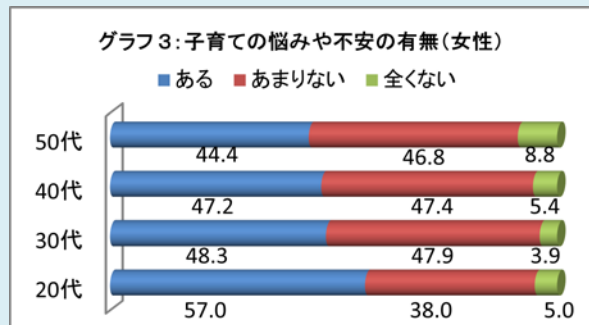
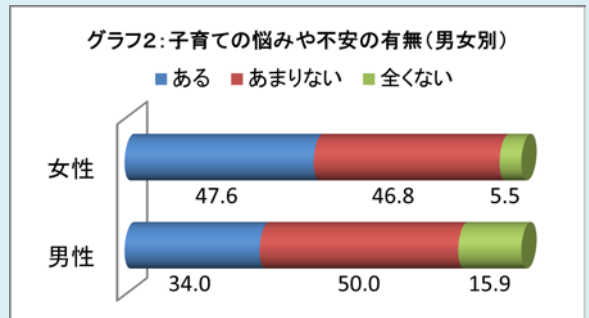
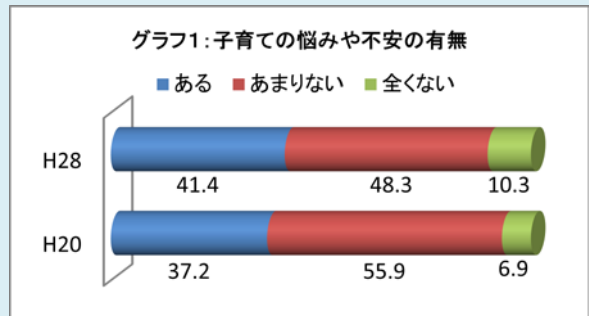
この「子育ての悩みや不安」の全国的な傾向について、平成 29 年 3 月に公表された文部科学省委託調査「家庭教育の総合的推進に関する調査研究報告書」をみますと右のグラフのとおりとなります。

「子育ての悩みや不安」を抱えている保護者の割合は、平成 20 年度と平成 28 年度を比較すると増加傾向にあります(グラフ 1)。また、男女別で比較すると、「子育ての悩みや不安がある」のは、女性のほうが男性よりも高い割合になっています(グラフ 2)。さらに、性別ごと、年代ごとに比較すると、男性は各年代におけるそれぞれの割合に大きな違いがない傾向にあることに比べ、女性は若い年代ほど「子育ての悩みや不安がある」傾向がうかがえます(グラフ 3、4)。

一方、「子育ての悩みや不安が全くない」と回答した家庭の多くが、子どもとのふれあいや子どもの生活習慣、地域との関わりなどの家庭教育実施状況について、「子育ての悩みや不安がある」と回答した家庭よりも行われていない傾向があると報告されています。

「子育ての悩みや不安」を抱く保護者の支援はもちろんのこと、その意識の自覚の有無に関わらず、子供

文部科学省委託調査「家庭教育の総合的推進に関する調査研究報告書」



を見る目を養うなどの家庭教育・子育て支援が必要と言えます。

その支援として、保護者が家庭教育充実のために必

要と思うことにおいては、グラフ5のとおり、行政や企業等の支援を望む一方で、「親がもっと家庭教育に取り組むこと」「親以外の家族が協力すること」など、家庭教育は家庭内で第一義的に行う意識がうかがえます。また、「子育ての仲間同士が助け合うこと」「地域の応援」「学校・幼稚園・保育所の支援」など、広い意味での地域のつながりによる家庭教育・子育て支援を求めているとも言えます。

この地域のつながりについて、さらに幅広い世代を対象に調査を行った「家族と地域における子育てに関する意識調査（内閣府H26 グラフ6）」によると、「子育てへの地域の重要性」について、約9割がその重要性を肯定的にとらえています。そして、その具体的な役割として、「安全安心な環境づくり（64.1%）」「悩みへの相談対応（58.1%）」「子育ての仲間作り（54.5%）」「地域行事（45.8%）」などが重要であるとしています。

子供と親が共に育ち合い、地域ぐるみで支え合い、つながり合う家庭と地域の協働による家庭教育・子育て支援が求められています。

本県にも、その昔、仮親、仮子制度という地域の子育て支援の仕組みがありました。この制度は、子供の健やかな成長を願い、実の親子とは別のたくさんの仮の親子関係を結ぶ仕組みです。例えば、出産から幼年期においては、出産について教えてくれる「帯親」、出産の際に赤ちゃんを取り上げてくれる「取り上げ親」、初めて乳をあげる「乳つけ親」、名前を付けてくれる「名付け親」、親が不在の間に面倒を見てくれる「養い親」、丈夫に育つよう拾い上げる「拾い親」がありました。また、青少年期には、性教育を行う「ふんどし親」や「ゆめじ親」があり、成年期以降においても、「仲人親」や「仕事親」などもありました。このような関係の中で、仮親は仮子を本当の親以上に叱り、指導し、見守りながら育てました。そして、より多くの人と人のつながりの中で、地域社会で自立し、共同できる人間関係を築き、一人前の地域を担う大人に育てていました。この制度は、血縁と地縁を基盤とした地域の共同による子育て支援の仕組みと言えます。

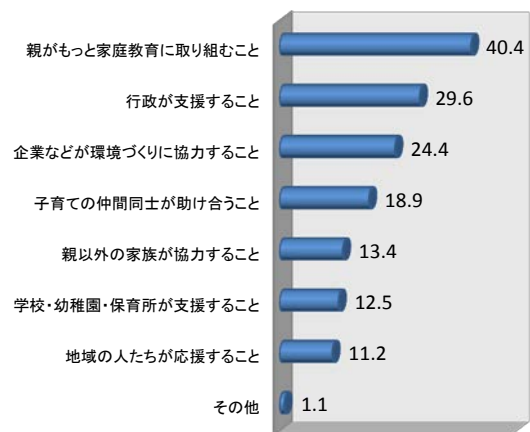
しかし、現在では、都市化や少子高齢化、核家族化の進行、子育てを支える地域社会とのつながりの希薄化等により、血縁や地縁を基盤とした地域の子育て支援の仕組みがなくなりつつあり、子育ての孤立化が懸念されています。子育てのモデルや相談相手が近くにいないことは、子育てに対する悩みや不安、負担感を

抱えやすくなります。また、情報化社会にあつて、子育てに関する大量の情報が身の回りに溢れていますが、正しい情報を取捨選択することが難しい状況にもあります。この課題の解決に向け、新たな縁を加えた地域の家庭教育・子育て支援の仕組みづくりが求められます。その新たな縁として、子供を通してつながる「子縁」と思いや目的を同じくする「思縁」、学びによる「知縁」が考えられます。それは、子育て支援という同じ思いや目的を持つ個人や団体をつなぎ、学びを通じてその絆を深め、新しい「地縁」をつくることであり、家庭教育・子育て支援によるソーシャル・キャピタルづくりです。この家庭教育・子育て支援によるソーシャル・キャピタルは、教育と保健福祉、医療などの連携により一層の広がりと深まりを増やすことが可能です。

「全47都道府県幸福度ランキング2018版（東洋経済新報社）」によると、子育て世代の幸福度は全国7位となっています。その連携の下、新しい縁によるつながりを基盤とした地域の家庭教育・子育て支援の充実を通じて、より一層子育てに幸福感を実感できる県にしたいものです。
(所長 藤原 安生)

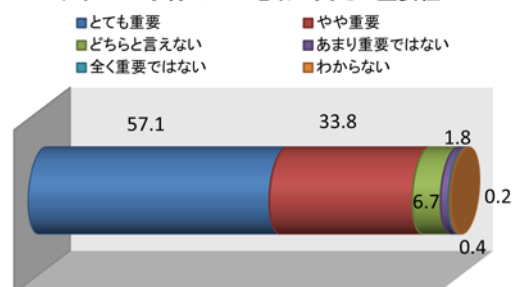
文部科学省委託調査「家庭教育の総合的推進に関する調査研究報告書」

グラフ5:家庭教育充実のために必要なこと



内閣府調査「家族と地域における子育てに関する意識調査報告書」

グラフ6:子育てへの地域の支えの重要性



岩手県生涯学習推進研究発表会

【1月31日(木)午後】



【講演】

「学校と地域の連携・協働の目指すもの」

〔講師紹介〕

1994年、鳴門教育大学学校教育学部初等教育教員養成課程卒業。2005年、九州大学人間・環境学研究科教育学専修博士後期課程修了。九州共立大学経済学部助教授等を経て現職。

専門は、リーダーシップ、ソーシャル・キャピタル、学校改善など。

著書に『学校組織のリーダーシップ』（2008年、大学教育出版）。共著に『新時代の教職概論－学校の役割を知る 教師の仕事を知る－』（2018年、ジダイ社）、『学校管理職養成講座』（2018年、ミネルヴァ書房）など多数。



愛媛大学大学院教育学研究科
教授 露口 健司 氏

【2月1日(金)午前】

★【研究発表】 当センターの今年度の研究成果を発表します。

(1) 市町村における家庭教育支援のあり方に関する実践的研究

※市町村の家庭教育支援をどのように補完すべきか、関係機関と連携して探ります。

(2) 学校と地域の連携・協働のあり方に関する研究

※岩手にふさわしい学校と地域の連携・協働のあり方について探ります。

【2月1日(金)午後】

★【事例発表・協議】「多様な地域学校協働活動の事例に学ぶ」

①北海道上士幌町教育委員会生涯学習・社会教育担当

社会教育主事

高橋 克磨 氏

②特定非営利活動法人まなびのたねネットワーク 代表

伊勢 みゆき 氏

③大槌町教育委員会地域学校協働本部 コーディネーター

木村 里美 氏

大槌町教育委員会学務課 指導主事

米沢 俊哉 氏

コーディネーター

秋田県生涯学習センター学習事業班

主幹(兼) 班長

皆川 雅仁 氏

日時

平成31年

1月31日(木) 13:30～15:45

2月1日(金) 9:40～15:00

会場

岩手県立生涯学習推進センター

〒025-0301 花巻市北湯口2-82-13 TEL0198-27-4555

一関市まちづくり推進部いきがいづくり課から、特色ある事業について寄稿いただきました。

国際感覚を養う「英語の森キャンプ」



一関市では、国際リニアコライダー（ILC）の誘致実現に向けた取り組みの一環として、平成26年から「英語の森キャンプ」を実施しています。

「英語の森キャンプ」は、参加した生徒がオールイングリッシュでの生活や外国文化の体験を通して英語力や国際感覚を身につけ、集団生活の中で責任感や自主・自立の心を育てて、グローバル化が進む社会に対応した人材を育成することを目的としています。今年度は、8月7日～9日（2泊3日）に、市内厳美町祭時のいちのせき健康の森で、一関市内中学校と平泉中学校の2年生総勢66名で実施しました。

参加した生徒を10班（1班6～7名）に分けて、それぞれの班にALT（英語指導助手）1名がついて支援を受けながら活動しました。

1 国際姉妹都市セントラルハイランズ市の生徒に一関・平泉を紹介

班ごとに、一関・平泉の文化（お祭、観光、もち文化、世界遺産）や学校生活などを、一関市の国際姉妹都市の生徒に、英語で上手く伝えられるようにと四苦八苦しながらも、紹介内容や方法を工夫していました。



オールイングリッシュでの活動に挑戦

2 国際姉妹都市の生徒とスカイプ（テレビ電話）を通して交流

一関・平泉の紹介をした後の質問では、お互いに知っていたアニメやテレビゲームの話題で大いに盛り上がり交流を深めることができました。交流後には姉妹都市の生徒にお礼の手紙を英語で書きました。



スカイプによる姉妹都市との楽しい交流

3 即興で英語寸劇に挑戦

班ごとにALTの支援を受けながらオリジナルの英語劇を考えて、みんなの前で発表しました。アンコールやALTの飛び入りなどもあって盛り上がり楽しむことができました。



オリジナル英語劇の発表

4 まとめ

参加者のアンケートで「英語で話す力、聞く力が前よりも上がっていることが分かった」「1日目よりも3日目になるとALTの先生の話すことが分かるようになった」「自分の英語がセントラルハイランズ市の生徒に通じて嬉しかった」などの声が多くあり、参加者は、英語に苦勞しながらも相手に通じた喜びと達成できた喜びで英語に対する自信につながりました。参加者は、楽しみながら英語での生活や外国文化を体験し、お互いの文化や習慣の違いを理解することができ、有意義な体験となりました。



英語力や国際感覚を身に付けた「英語の森キャンプ」

※今年は、小学生（6年生）の英語の森キャンプも11月23日～24日の1泊2日で実施しました。

